

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成30(2018)年
11月号

通巻579号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成30年11月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



紅葉 (2017.11.23、拝殿にて)

あじさい邑 矢追房子さん撮影

再録 『すさのお』紙より

庶民の生活に深く根ざした土着信仰 (全16回)

法主 矢追日聖

全16回を不定期的に飛び石連載してゆく予定です。再録にあたり送り仮名や文字使いは現代風にしました。(編集部)

(一)

昭和42(1967)年11月23日発行

『すさのお』第14号より

(法主、満55歳)

昔の人が「思ひかなえば命がない」とよく呟いていた声を耳にしたことがある。ままにならぬは浮世のならいとはよく言ったものだ。白髪がちらほらと頭に目立ってくる年頃になると、こうした言葉が痛く身に沁みる思いがする。この間、京都のある観光寺院へ遊びにいらして、休息時に出されたお菓子が一文銭型で、「吾唯知足」と四角い穴のまわりに紋様化した浮き彫りで配列してあったのを、ニヤリと笑いながら味わって胃袋の中へ大切に納めた。文字の心だけは糞になって出ないように祈りながら。

かくの如く、昔から残されたものの中には、味わって価するものもあるのだが、その反面、我々の生活の中に深く根ざして抜きがたい害毒になっているものさもあるのに、あまり表面化せず過こされていいるのはどうしたことであろう。

何か事件があった直後には、必ずといっていいくらい次のように、「二度と再びこんな悲惨な大事故は起きないように

……、被害者の皆さんには申訳がなく、何とお詫びの申しようがありません」と言うまでもなく、これは当の責任者のありふれた詫びの言葉であるが、もう聞きあきるほど何回かそうした事故を繰返しているのが現実である。そして世の有名人や心ある人々はそうした事故や事件のたびに、それ等についての意見や改善方法を各種の報道機関を利用して世に訴えているのであるが、一向に顕著な効果が現われないのは返す返すも遺憾に思う。

誤解された信仰

一口に改善改革とはいっても、言うは易く行うは難しであることはこと宗教に関しても同じことが言える。

あなたもすでに知っていることと思うが、今年の十月四日、朝日新聞に「迷信食いもの」と大きな横書きの見出しの下に、事件関係者の五人の顔写真がずらり並べられて、「祈とうで殺せる」「人妻らに生命保険」「住職も一枚加わる」と大々的に掲載された記事があった。これは四国の高知県で発生した宗教に関連性をもつ一つの事件である。

どうせ新聞に出ている報道記事のことだから、その真相は分からないにしても、こうした種類の事件のあったことだけは信じるに足りる。その冒頭に、「県下では去年の暮れ、祈とう師の占いで、毒物使用の犯人扱いにされた農民が自殺する事件があるなど、祈とう師に占ってもらう風習は根強く残っており、同県警本部では迷信を打破するよう強く呼びかける」。こうした書き出しにひきつづいて小川高知県警刑事部長の話として、「まったくバカげた話だ。この事件は迷信を盲信した人を仲間が利用それに住職らが加わったものだが、もとをいえば県内に残る因習が原因だ。なんとか

こんな無知からくる悲劇はなくしたいものだ」という談話が掲載されていた。

このように祈とう師の占いによって一つの重要な事柄が判断され、周囲のものがそれを信じたために一人の人間が死に追いやられるという非常識について、広く社会へ訴える啓蒙的な嘆きは常識的な人であれば誰もがいだく心情であろうと思う。「迷信を打破するよう強く呼びかける」とか、「何とかこんな無知からくる悲劇はなくしたいものだ」と書き立てたところで、一体、誰がかくの如くに深く根ざしたこの因習を根底からくつがえして、一途に、その浄化運動に挺身するのだろうか。

利欲と宗教は無縁

こうした立派な意見をもつ人ほど、自ら手を下して体当たりするような度胸は恐らくもち合わせていないと考える。知識人の弱さでも言えるのであるが、若しこの考えに対して抵抗を感じ憤慨するような御仁があるとすれば私は嬉しい。手を取って仲間になろう。

「蛇の道はへび」とか、「餅屋は餅屋」というように、先ず宗教人の自覚に待たねばなるまい。

数ある宗教人の中には、学識経験もあり、気骨の逞ましい人もかなり隠れている筈と思う。しかしこの種の啓蒙運動には、ただ宗教人だけの努力のみでは効果はおぼつかないので、心ある人はこうした運動、つまり伝道教化には、私心をまじえないう全面協力をしなければならぬと思う。それは如何なる宗派や教派や教団の宗教人であっても、この人ならと思えば率先してそれに参画してほしいと、私はひそかに祈りたいものである。

この件に関して服部大阪社会事業短大教授の話として、「……日本の文明、とくに技術的なもの

は高度に進んでいるが、精神的なものはおざりにされて、正しい宗教観が確立していないところに問題がある。積極的に宗教への正しい理解力を養う必要があるのではないか」。

続いて、あと二つの意見が述べられている。なかなか単刀直入、実に明快な意見には敬意を表したいが、猫の首に鈴をつけるころまでは立派な鼠の知恵だったが、その鈴をどうして誰がつけに行くか、という所まで具体的に分からないのでなからうかという感がなきにしもあらずである。とはいえ、教授の御意見には全く私も同感である。

(一)

昭和42(1967)年12月23日発行

『すさのお』第15号より

(法主、満56歳)

天災や人災による大被害、戦争や交通事故による大惨事、更には高知県で起きたような信仰による悲劇などは、誰もが望む二度とあってはならない事柄である。だのに心ある世の人々の祈りを背にして、次々とこうした事象が繰返されている現実を何と解釈すればよいのだろうか。

私はその一つの原因として、今の人達は精神的な貧困者が余りにも多いのではないかと思う。自分の能力を自覚して、足るを知るといった人が甚だ少ないように思えるからである。現在にあっては政治に対しても、社会に対しても、職場に対しても、家庭においても、対人関係においても何かにつけて不平等があり、欲求不満があるようである。こうした社会情勢は、色々な種類の宗教を生み

出し、それを成育させてゆく大きな母胎の役割をもっている。何時の世に於いても、生活の条件は幸福に暮らすということにつきる。けれど日々喜びをもって生涯を終わった人は恐らく雨風の星さんのような存在だったと思う。在りし昔の多くの人は、国家的、社会的な不平不満の心を、或る信仰によって自己慰安をする。つまり運命的あきらめを、悟りという美名のもとに、それを喜びに置き換えることができた。そこで、心の頼り所を神様や仏様に求め、それを信じることによって自分の幸福が約束されるという、最も幼稚な信仰が深く民衆の心の底に根を下ろす大きな原因となったようである。

一面これは、権力者に対して余りにも民衆が力弱く、政治の不均衡がかえって御利益信仰を助長する大きな力になっている。こうした一方的な人間の欲求を満足させるため、神仏を信仰するという交換条件の変形的な信仰形態が、今の世まで生き生きとして人の心の中に流れているとみる。

本質的な人間の弱さ

我々人間の明日の命を、明日の幸福を確実に保証してくれる何ものもない人生にあっては、当然として襲いくるものは孤独感であり、心の不安定である。人は思わず心のやすらぎの場を求めたくなる。人間世界においてこの場が見つからなければ、人間がいよいよ別な世界に頼りたくなるのは人情の常である。

この本質的な人間の弱さが、迷信的な或いは神秘的な、つまり人間の知性の及ばないもの、超人的なものに対してあこがれをもったり、盲目的にすがりたくなるのに何の不思議もないのである。私が今日まで多くのの人々を扱ってきた経験か

ら言えば、科学や合理主義を絶対至上として世渡りしてきた、所謂知識人或いは文化人といえども、科学や理知といういわば虎の威をかる狐のような意外に弱い一面をもっていることをしばしば見せつけられた。

彼等の中には、「迷信打破」や「邪教撲滅」を叫ぶ人が多く、その声は嬉しい響きを社会に流す。その声には私も賛成できるのだが、迷信といい邪教という、その依ってくる判定の尺度を何を以って決めるのか、これはなかなか難かしいことと思う。未知のもの、未解決の問題が山積している現在の科学であればこそ、科学者はその解明に渾身の力をふりしぼって研究に取り組んでいるのではないだろうか。この段階に於いての科学至上を叫ぶ人達は、見方を変えれば、未完成な科学を絶対とする狂信者の類に等しいと言われても仕方あるまいと思う。

科学至上主義者、宗教への盲信者は互いに「目くそ鼻くそを笑う」といった仲のよい間柄のようである。両者相通ずる一致点を持ち合っているため、昨日まで邪教呼ばわりしていたその宗教へ、今日は盲信者になっている文化人もかなりあるようだ。

高知県で起った「おがみ屋信仰」の醜態は、大なり小なり全国各地にも存在しているものであるが、たまたまそれが事件として社会に問題を投げ掛けたに過ぎないもので、いわば氷山の一角に等しい。ことが起これば「県内に残る因習が原因だ」とか「正しい宗教観が確立していないから」と言う。

こうした言葉にほんとうの問題があると思うのだが、これは後日にゆずるとして、私は最近、宗教の力が地域社会の人々の心の中に、七百年の法燈を守り続け、力強く静かに生活の中に脈々として生きている現実を見ることができた。個人の欲

望を満たすためのおがみ屋の信仰と、衆生が救われるという宗教的信仰の両面が、現在社会に於いて表裏の如くくつきりと現われている現象は誠に意義深いものがあり、有難たく思うのである。

暮らしの中の敬虔

去る十一月二十五日、石川県石川郡松任町浜相川の公民会館に於いて御手洗喜米会（神保徳久会長）が、午後二時から講演会を催されたのであるが、この地の中山治次氏が大倭の門人手取屋ふみさんの兄に当たる関係からその日の講師に私が招かれることになった。

講師のような形で地方へ出向くことは、私にとってこれが最初である。時機の到来か、明るい喜びに溢れて、車は越路をさしてつつ走る。天気は清朗にして、十一月下旬とは思えない暖かさであり、白山の霊峰は霞一つなく美しい姿で迎えてくれた。その使者として高級な古天狗霊が身近にきて、御守護を申しつつかって参ったと微笑を浮べて懇ろに挨拶をする。私も道中の安全を頼んでおいた。

会場は満員の盛況だった。会長の挨拶に引続き、二時半頃から演壇に立つ。老人がその大部分を占めていた関係かも知れないが、その話の内容は自己紹介に近い私の過去の遍歴や、大倭の在りのままなる姿を知らせたに過ぎなかったが、四時までが与えられた時間なのに知らぬ間に一時間以上経過しているのに気付いて驚いた。水を打ったような静粛な聞く態度からくる彼等の気脈は、異様な靈波となってひしひしと私の心に響いてくる。涙がでる程うれしかった。あちこちで念仏の声がすすかに聞えている。心から在りし日の親鸞聖人の御徳を偲びながら降壇したのである。（つづく）



島比呂志と『火山地帯』と私

鹿児島県鹿屋市 立石 富生

東京の国立ハンセン病資料館で十一月十七日から十二月七日まで「島比呂志生誕百年展」が開かれることになった。それに合せて十二月一日、私は同じ所で島比呂志の生涯について語る。島比呂志に関心を持っている人がどれほどいるのかわからないが、私にとってはじつに有難い企画である。島の直筆原稿等の展示と私の拙い講話、充分ではないかもしれないが、少しでも多くの人に島比呂志のことを知ってもらいたいと思っている。

東京で島比呂志について語るのは今回が二回目である。一回目は今年の二月、あるNPOの招きで東京し、「島比呂志の求め続けた人間への道」と題して一時間半ほど喋った。四十人ばかりの小さな会だった。質問もいくつか出て、まさに「ハンセン病問題から学ぶ集い」にふさわしい活発さだった。夜には懇親会もあつてさらに盛り上がり、私は数人の新しい知己を得た。

今年には島比呂志生誕百年、そして、ハンセン病療養所星塚敬愛園で誕生した文芸同人誌『火山地帯』六十周年の記念の年である。『火山地帯』は島が主宰し、三回芥川賞候補作を出した。残念ながら受賞には至らなかつたものの全国の有名な同人雑誌の仲間入りをし、ハンセン病療養所を拠点とする特異な同人雑誌として認知されるようになった。その歴史ある『火山地帯』を私は二十年前に引き継いだ。もちろんスムーズにいったわけではない。私が固辞したのだ。園内の創刊同人が引き継ぐべきだ、というのが私の思いだった。

当時、私は会社員で四十九歳だった。島の苦勞を側で見ていたので、会社勤めをしながらの編集

発行は無理だと考えていた。片手間で出来る仕事ではなかつた。原稿を集め、チェックし、悪ければ書き直しかボツ、そしてようやく割り付けて印刷所に出す。三回の校正の間には埋草の原稿書きも入る。出来上がった誌の発送、会費納入の連絡もある。とにかくすべて一人でやらなければならぬ。どれほど時間がかかることか。時間だけではない。体力、根気も必要だった。それに注目されている同人誌だったし、有力同人のほとんどが私より年上だった。尻込みするはずである。

紆余曲折の末、結局引き受けることになったが、それは酒が介在した決断だった。同年輩のある同人が酒を飲んで私に電話をかけてきて、私の優柔不断さを話した。それにかちんときた私が怒鳴り返し、いくらかやり合つたあと、「そんなことをいわれるくらいならおれがやる」と宣言してしまつたのだ。結果として、相手にうまく乗せられたということになる。

近ごろ折にふれて島比呂志のことを思い出す。二十二年間のつき合いだった。教えられたのは文学だけではない。側で島の話の聞いていただけ。何を感ずるのか、それはその人しだいである。島の家には外部から多くの人が訪れていた。私が感じたのは人間としての在り方だった。師だったのに、私は一度も先生と呼ばなかつた。親子ほどの年の差で素養もまるで違つていたのに、私は島比呂志を文学的には対等だと考えていたのだ。死生気だつた。師であつたことに気づいたのは死んでからのことなのだ。これは文学をやる者の不

追悼

東大阪市の荒本典社会館で行われた、野幸重さん(9月26日帰幽、享年91歳)のご葬儀の折、夫の保夫さん自身が文章を書かれた会葬御札を掲載させて頂きます。

『今まで 本当にありがとう』

妻 幸重は昭和三年五月三十一日に、松田家の長女として和歌山の地で生を享けました。実り多き青春時代を経て結婚、その後一人の娘を授かり、妻として母として私達家族を温かく見守つてくれました。時に厳しい一面もありましたが、何事もさつちりしていた妻は世話好きで周囲の皆様からも親しまれていました。

今、臉を閉じると、夫婦二人で日本全国いろいろな処へ旅行に出掛けた事や、娘達の服を手作りする横顔、また大好きな孫達の優しいおはあちゃんとしてその成長を見守る笑顔が思い出され、もう少し一緒に過ごしていたかつたと思ひが込み上げてきます。これからは妻が残した想い出を心の財産として家族一同歩んで参ります。

本日はご多用中ご会葬頂き誠にありがとうございます。

通夜 平成三十年九月二十九日
告別式 平成三十年九月 三十日

喪主 野 保夫
親族一同



矢追房子
野 幸重
鈴木かあさん
平谷照子
中西千津江
敬称略
H14・12・14

遜さなのかもしれない。恃むものはおのれしかないという尖った覚悟。

それにしても、島比呂志の名前がだんだんと忘れられていくような気がしてならない。それはハンセン病問題が社会から忘れられていくことと同語だと考えている。らい予防法が廃止になったのは一九九六年、その二年后に国賠訴訟が起こり、三年間の裁判闘争の結果、勝利した。それでハンセン病問題は決着したという社会風潮が生まれ、根の深い問題が覆われてしまった。偏見差別は今も続いているのである。

島比呂志は十三人で始まった裁判の第一次原告だった。そしてもう一つ付け加えるなら、島が九州弁護士会連合会へ出した申立書によって裁判への扉が開かれた。九州弁護士会が療養所の実態調査に乗り出し、そこから「らい予防法違憲国賠訴訟」につながっていったのだ。島の一通の手紙から裁判が始まったといわれる所以である。

島比呂志は、北條民雄や明石海人らと同じようにハンセン病文学史に刻まれる作家である。詩を書き、小説を書き、評論を書いた。しかし島の名前は、らい予防法廃止に尽力し人権回復をめざして闘った元患者、というイメージで捉えられている。確かに国や社会に訴える論文をたくさん書いて療養所から発信した。島の提案や指摘に勇気づけられた人も多かっただろう。私に引き継ぐ四、五年前から小説は書いていなかった。小説より評論のほうが訴える力があつたのだ。だからそのイメージが定着している。しかし、島比呂志は間違いない小説家だった。私はそう考えている。

島比呂志の生まれ故郷は四国の観音寺市。東京の専門学校(獣医科)に入ったところに発病した。卒業後、満州の研究所に就職し、三年で帰国して母校の助教教授となったが病気が進み、教職を棄て

て四国の実家に蟄居した。その後ハンセン病療養所に入り、五十二年間過ごした。夫人も離れず夫についていった。そして八十歳を過ぎてから北九州市に社会復帰したが、四年足らずで黄泉へ旅立ってしまった。

熱望していた帰郷はついにかなわなかった。



子供の頃のこと——屋久島育ち

子供の頃は誰もがそうであるように毎日遊んでいた。山育ちだったので野山を駆け回り同年代の友達と日々冒険した。

私は保育所に通わなかったのでまだほんの幼い頃の遊び相手はもっぱら姉兄や家の動物たちだった。猫、犬、鶏やあひるなどなどみんなよく遊んでくれた。

あひるがよく隠れて卵を産んだので木のウロなかを見て回り、葉っぱや木の枝の踏み倒した丸い空間に大きな卵がころりんとなると、宝物を見つけたように嬉しかった。

鶏は何羽かいて時々増えたりしたので、大きい順から「お父さん」「お母さん」「お姉さん」「お兄さん」「妹」「弟」とつけた。語彙が尽きると日本地図にある島々から名前を付けて「八丈」「硫黄」「宝」「子宝」「喜界」「奄美」「徳之」「与論」……しだいに南下していったが、今住んでいる沖縄にたどり着く前に鶏の数は増えなくなった。暇な時はパンのミミを棒と紐の先に付けて鶏釣りをしたりした。半放し飼いの鶏たちだったからか、荒々しい性格で不思議な形状の鶏冠や脚の鍵爪やギロリとした目つきがいかに強いという感じだった。鶏を追いかけてはしても抱き上げるのは怖く

※ 10月28日に立石富生さんは交流の家を訪ねて来られました。先月号あじさい日誌の通りです。たまたま頂いた「火山地帯」を開くと、「鳥取の飢え殺し」という詩が掲載されているのを見つけ驚きました。秋の文化行事の行く先である鳥取城を、羽柴秀吉が兵糧攻めで落城させた時の悲惨な状況がひしひし伝わりました。(春)

できなかった。

猫もよく子猫を産んだので、子猫はいつも家にいた。押入れの奥や家の隙間で子猫の声が聞こえるようになると一生懸命探して構った。一度遊びに来ていたお姉さんに子猫を見せたくて大きな粉袋に子猫を入れ、取り出して見せようとしたら半狂乱になった子猫に小指を噛みちぎられんばかりに噛まれ大泣きしたことがある。今もまだその傷はあって、子供ながらにとでも反省した。

私の人生初めてでかつ一番の友達は生まれた時からいた犬のコロだ。毎日のみ取りダニ取りをしたりして一緒に出かけた。豆柴の雑種のコロは賢くとも優しくかった。コロは私が中学生に上がる頃に亡くなった。私が初潮を迎えたのとほぼ同時だった。父はコロを道路から家へ上がる階段の一番上に埋めた。ここならみんなの足音が聞こえて寂しくないからということだった。納得した。

自分で走り回れるようになると近所の幼馴染たちと毎日遊んだ。鬼ごっこ、缶蹴り、木登り、秘密基地作り、道路に絵を描いたり、道路遊びで好きだったのはお店屋さんごっこでよく描ける石をさがしてきてパンやお花などの商品を描き、お金の石を持って「いくらですか?」「百円です」と

沖縄県那覇市 手塚 歌野子

かやっていた。石は川に綺麗な色が出るのを探しに行く。赤や茶色・黄土色・ねずみ色、不思議な色がいっぱいあってあれもこれも拾った。

夏はもっぱら川遊びで家に近い浅瀬や大きなれば深い川にも飽きずに行った。川では陣取りや飛び込み、ゆるい滝の滑り台、カジカ捕りやエビ捕り。川の底は深い緑色で、姉や兄たちは川底の砂を取ってくる遊びをしていたが、私には鯨のような得体のしれない生物がいつもいるように思えた。

川で体が冷えたら熱い岩肌で寝転んだ。日に温まった岩に水が蒸発する匂いはまさに夏の匂いという感じだった。岩をひっくり返してミミズを探し、釣りもした。釣った魚は網で捕った魚より哀れな感じがした。

川といえば、子供だけが入れるような岩と岩の隙間の洞穴に入って原始人ごっこか火を焚いて焼き芋を始めたが、洞穴状の隠れ家なので煙が充満して涙が出た。書齋からその煙を見た(山尾)三省さんが河原に降りて来て、こつびどく怒られたことがあった。手を結局食べたかは覚えていない。普段内気な性格が、遊びに夢中になると野生に戻ったようになるので、幼馴染には怖がられたりからかわれたりした。一度杉の木の上から幼馴染を落としてしまったことがあり、彼は泣いてそのまま家に帰っていった。私は謝ることもできずどうしたらいいかわからないまま夜を過ぎ、翌朝謝ろうと決意して幼馴染の家に行くと、彼は「遊ぼう」と笑顔で出て来た。その笑顔に本当に救われた。

海に行く機会はそれほど多くなかった。遠いので子供だけはいけないうちの大人との時間だった。両親やきょうだいと行く海は友達との遊びとは違う幸せな感じがかった。

ときどき子供ながらになんだかかなしいと感じることがあって、そういう時は山の中に入って自分のお気に入りの木の根元に座った。そういうことを何度か繰り返した。

裏山には焚き木拾いによく入ったが、コロヤソラ(ソラは2代目の犬)とスキ野原に入り込むことがあった。自分の身長よりはるかに背の高い秋のススキがふわふわとしている。その時にしかない好きな場所だった。大人になったらここに家を建てようとか夢想していた。

雨の日の遊びは大体が家の中でのかくれんぼやトランプだった。

台風の日には避難所でみんなでカードゲーム三昧で、台風一過の翌朝は集落中を見て回った。水や杉の葉が道路を覆い、川が普段にも増してごうごうというのはなんとも面白かった。

幼少期が私の一番幸せな時期で、もう戻れないことが悲しくなったり、自分はあそこから遠く離れてしまったと感じることが以前はあった。

でも近ごろは子供の頃の自分がぐっと身近に感じられて、やっぱり地続きに自分を支えてくれているんだなと思える。というのはやはり今も私を慈しみ受け入れてくれる夫を始め周囲の人々のおかげである。いつもありがとう。

こだま

▼屋久島白川山 手塚賢至 H30・9・6
拝啓 岸田哲様

お便りいただきまして……用件は返事不要になりました。省略……。せっかく(返信用の)葉書を送ったのであった。返信させて下さい。

先日、出版された鶴見俊輔さんの『敗北力』(編集グループSURRE)を読んでいたら、

「内にある声と遠い声」という題の文章に、日聖さん、柴地さんのことがありました。1996年の『らい予防法廃止記念フォーラム報告集』からの講演。御存知かとは思いますが、私は改めて紫陽花の成り立ちを大きな歴史の中でとらえる鶴見さんの眼力と、お二人の働きから今に至る大傑に感慨を受けました。

台風21号は屋久島の東を北上し、こちらは大禍無くも、関西方面は直撃を受け被害が多く大変な様子を心配しています。奈良も台風の中心の東側で雨、風強かったです。天地の働きに、あまりの無力を痛感します。

豪雨、台風、そして地震！ せめて原発だけでも早く止めるのが先決と願う、いや、もう祈る。8月28日、今年も三省忌を行いました。三つの遺言、水・平和・原子力、根源の問い。

9月8日は、あの次郎坊さんの祭礼の日です。林修三さんからも問い合わせがあり、御一緒したいとのこと。嬉しいのですが、今回は都合がつかず出席できません。今年は残念ながら行けません。しかし比良山の八雲高原にある八雲観音(堂)の祭事が10月6日(土)に行われます。次郎坊山にあった比良明神が廃された後、近くの八雲高原へ移し、観音様を祭祀し、毎年この時期に山行、堂開きして比叡山より阿闍梨僧も参加されるそうです。次郎坊祭同様大切な行事。林さんも日程調整中です。

今日はこれにて乱筆失礼。

▼神奈川県大和市 永坂まゆり H30・10・19

杉本(順一)さんから法主さんのCD三枚を送ってもらいました。妹(あづみ)とも携帯に音を入れて、私は朝電車の中で何度も聞いてます。ありがたうございました！

寸 紗

第134回

田中 裕彦さん



鍼とパンと

今回登場していただく田中裕彦さんはベテランの鍼灸師であるが、同時に奈良市中町の自宅前に煉瓦窯焼のパン工房を構える手づくり無添加パンの作り手でもある。

父方の祖父である田中熊治氏は法主様の父・矢追隆藏氏の実弟で、大正末から昭和の初めにかけて大倭神宮等に関する宮内大臣宛の上申書を携えて、隆藏氏とともに何度か上京したという記録がある。熊治氏が養子に入った大阪の田中家は裕福で、「実家の矢追家に資金援助もしていた」と裕彦さんは父親の田中奇九法氏から聞いたことがあるという。

その奇九法氏も、敗戦直後の大阪に街頭宣布に出かける法主様に、青山日元氏等とともに同行して法主様の活動を支えている。裕彦さん自身も、「子供の頃から元旦になると、

父に連れられ深夜の大倭神宮での年始祭に参加して寒かったのを覚えている」というし、20代の初めには大倭安宿苑で事務員として勤務していたこともあるから、田中家の代々に亘る大倭との濃い絆が窺われる。

まずは裕彦さんの生い立ちを追ってみると、昭和28年5月16日に奈良市中町で生れた。「小さい頃から他人と群れることが得意でないという性格の持主だったが、それは、当時奈良女子大のすぐ近くにあった附属の幼稚園と小学校への遠い道のりをバスと電車を乗り継いで一人で通っていたということも原因の一つだったかも知れない」と語る。反面、自立心の強いしっかりした子供だったとも想像できる。父親が大阪市の交通局に勤務していた関係で大阪の今里に引越し、小学2年からは地元の小学校に通うことになる。

父親が鍼灸を学び鍼灸師として活

動をはじめていたという経緯があり、「高校生の時には、独自の鍼を自分で工夫して製作しはじめていた父を手伝って、治療鍼の作成に取組んでいた」というから、生来の器用さがあつたと推察できる。ご自身も大学時代から夜間の鍼灸学校に通い、その後父親とともに鍼灸院を支えた。

大阪から奈良に帰ってきたのは昭和53年頃で、パン作りをはじめたのはその後のことである。「父は昔、いいところのお坊ちゃんだったので、小さい時に食べたドイツパン等の味が忘れられず、無添加のおいしいパンを自分達で焼こうということになった」。そして、ヨーロッパ各地で昔から伝わるパン焼煉瓦窯を自分達の手で再現したのだという。田中家の人達の器用さとマメさが、ここでも生かされているのが印象深い。

パン工房のパンフレットによれば、「煉瓦の放射熱（遠赤外線）だけを利用してするため、特有の浸透熱によりパンの中心までじっくりほど良く焼き上げることが出来るのです」とある。防腐剤や乳化剤等の食品添加物を使っていないという裕彦さんのパンは、確かに歯ごたえもよく、味わい深い食感が残った。現在は月・木・金の3日間だけパン作りをして希望者に分けているが、大倭にも何人かの愛好者がいる。

父親の代から使用している鍼は、「材料からすべて父親が考案したものを手づくりで仕上げたもので、直径0・4ミリから0・9ミリまで5段階ほどあり、経絡の凝りの度合により使い分ける。いやむしろ、経絡が鍼を選択する」という不思議な世界である。そのために、道具である鍼も精妙な感覚で作らなければならぬのだろう。

鍼治療に関しては実に熱心に蘊蓄を傾けてくれたのだが、残念ながらここでは紹介するスペースが足りない。現在は火・土の2日間だけ鍼治療を行っているとのことである。

裕彦さんの家のあたりは高台になっていて、そこに法主様が昭和54年前後に波多杜大善神としてお祀りした塚がある。「この付近で何人もの方が不幸な亡くなり方をしているという事実もあり、法主さんに見てもらったところ武将霊が出てきたというところでお祀りしてもらった」。法主様の指示で田中家の裏庭の一角に神籬を植え、その前に大きな丸石を置いたお祭りの場所を設けている。

陽子夫人との間には2女1男がおり、末子の長男もすでに26歳になったとのこと。

今回の取材では、鍼にせよ、パン作りにも、熱心に追求する姿に圧倒された。（聞き手 川岸田哲）

あじさい日誌

10月15日 大倭神宮の月次祭。半年振りに新潟県佐渡市の平田弘之・緑夫妻が友人と共に参加りされ、大倭会館に1泊。

10月23日 大倭大本宮月次祭。祭典後、昭和42年10月23日の法話で、この日発行の『おやおまと』10月号「みんなと仲良くする」という簡単なことが一番難しい」の元録音をお聞きしました。その後、もう自分の話なんか必要ないやろと言っておられた教長さんが久しぶりにマイクを受け取って、日頃感じることが肩のこらない話しぶりで皆、笑わせてもらいました。

3時半から大倭会館で11月17日の大倭会文化講演会の準備会が開かれました。

10月28・29日 大倭会文化行事、両日とも好天。午前8時に大倭病院前からバスで出発、鳥取砂丘で湯浅芳郎・高橋良美・見田暎子さんが合流して参加者28名。羽合温泉に宿泊、翌日は鳥取城、野の花診療所の徳永進医師の講演と、密度の濃い旅でした。次月号で詳細報告予定。

10月30日 大倭紫陽花邑の71歳誕生日です。昭和22年、満36歳の法主様が妙月かあさん、輪孺美(長女)、家麻呂(長男)、美壽紀(次女)、志津女(四女)の家族等と共に庄山の実家から

この地に遷られました。池と田圃に畑、声が聞こえるのは狸や狐たちの会議だけ……。そんな山の中に半年前から露払いの使命をもって青山日元さんが2人の子供さん(良・節子姉妹)と共に住み始めておられました。

11月2日 F I W CのOB、高橋孝一さんの紹介で、岩手県盛岡市の石雲禅寺の尼僧である紹稟さんが交流の家に1泊。全国行脚の修行中とのこと。

11月5日 栗山美智子さん(熊本県南阿蘇村)が奈良の友人と来呂、藤田啓子・杉本順一・岸野春子さんが教務本庁等で応接。現在、南阿蘇村の立野峡谷下

流にダムが造られようとしている、熊本地震で崩落して有名な近くだとのこと。地形が複雑でこの付近では一番もうい場所であり、必ず未来に大きな禍根を残す危険なダムになると栗山さんは驚き、同じ

思いの人達と「阿蘇自然守り隊」の活動を開始されました。そのアピールのために冊子を作るべく、大倭印刷の青山法義さんとも話し合われました。

11月6日 大倭神宮

月次祭

夜、大倭会館で邑倭の会。12月の邑の行事予定も決められました。

11月10日 午後、交流の家でF I W C定例委員会。

11月15日(通所) 大阪府吹田市のニフレルへ遠足。間近に魚や動物を楽しみました。

10月20日 数名が音楽療法士に より定期的なレッスン。

(須加宮寮)

10月18日 ホットプレートで焼きたてのお好み焼きの昼食。

10月22日 買物会でイズミヤ学園前店へ行きました。(長曾根寮)

10月15日(デイ) 全利用者のためこの日から1週間を「運動会週間」としました。

10月25日(特養) 誕生会で4名の方(内米寿1名)のお祝い。(茂毛路園)

10月31日 創作料理の昼食や仮装の記念写真でハロウィン。(八重垣園)

11月5日 書道クラブで古今和歌集・源氏物語のかな文字。

日聖祭(案内) 平成30年12月23日(祝)

大倭七十五年 元日

法主日聖師の御誕生を記念する祭典

○午前10時、法主様の奥津城に参拝。

午前10時30分より大倭大本宮拜殿において日聖祭がとり行われます。

○午後1時より、大倭会館で祝賀の会が催されます。

直会弁当を頂きながら、直会演芸会として、隠し芸など披露して頂ける方を募っています。

楽しいひと時を共にすごしましょう。

●12月15日まで受け付けています。

◆演芸会担当 中島武宣(大倭印刷内)

TEL 〇七四二一四四一〇〇二番
FAX 〇七四二一四四一〇〇九二番

あんない

*金鶏祭(大倭神宮)
12月4日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

金鶏祭については、『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流―長曾根邑のすめらみこと」等を読み、改めて「和の光」の心を自分のものとしたいものです。

*月次祭(大倭神宮)
12月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭神宮)
12月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第599回祝会
12月16日(日) 午前9時より「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。昼食は用意されます。なお、今年は第3日曜日ですので、お間違いのなきよう、どうぞよろしくお願ひ致します。

これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

*日聖祭(大本宮拜殿) 及び直会演芸会
12月23日(祝)
大倭元日。
上の「案内」をご覧下さい。
*大倭神宮境内・周辺大掃除
12月24日(振替休日) 午前9時より。有志の皆さんは参加下さい。昼食は用意されます。